

## 福音主義神学における聖書釈義

津村俊夫

### はじめに

今回与えられた演題は、1985年11月25日～27日の第3回神学研究会議の時の、私の発題講演「福音主義の聖書解釈——その方法論の確立をめざして」<sup>1</sup>と殆ど同じである。

### 30年間を振り返る

この30年間、福音主義神学会において、聖書釈義に関わる諸問題が取りあげられることが殆どなかったのではないかと思う。今回、久しぶりに取りあげられたことの意義はまことに大きい。福音派であれば、当然であるはずのことを、時々、立ち止まって確認することが必要であるからだ。「聖書信仰」が単なるお題目になってしまわないためにも、お互いの理解を確認し合うことが必要であると思う。

第2回研究会議で舟喜順一氏は、発題講演「靈感の用語と概念——用語整理のための覚え書」で、次のように述べている。

「聖書の理解、あるいは正しい解釈は、肉的な理性に頼ってでなく、聖霊の照明に依存してなされるのであるが、そのことは聖書のことばを信頼し、それを正面から学ぶことなしには不可能である。」

「聖書が、客観的な文書でありプロポジショナルな啓示であることは、特定の方法論によって、聖書のすべてを理解しつくすことはできず、絶えず聖書のことばに帰って、聖書自体をより正しく、より全体的に理解するための努力を人々に要求することを示す。」<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 拙著「福音主義の聖書解釈——その方法論の確立をめざして」『福音主義神学』第17号（日本福音主義神学会、1986年）40-57頁

<sup>2</sup> 舟喜順一「靈感の用語と概念——用語整理のための覚え書」『福音主義神学』第15号（日本福音主義神学会、1984年）13-33頁

私たちにとって「聖書のことばを信頼し、それを正面から学ぶこと……絶えず聖書のことばに帰って、聖書自体をより正しく、より全体的に理解するための努力」が必要であると言うことである。果たして、私たちの聖書を正面から「読む」力は、30年前に比べてどうであろうか。

福音主義の聖書解釈者が直面している最大の問題は、嘗ても、今も、積義における聖書批評学の位置づけであり、みことばを「正面から」学ぶための方法論の確立ではないかと思われる。それは、「靈感」や「無誤性」の問題が、つまるところ聖書をどう読むか、個々のテキストをどう積義するかということに基づいていて、その積義自体がそれぞれの時代の「批評学」の影響下において行われるからである。

### 積義と聖書批評学の関係

この30年間に何が起きて来たか。人文科学全般に於いてそうであるが、「聖書学」もその一部として、言語学、文芸学における方法論の潮流の影響を受けてきたのではないか。それは、構造主義からポスト構造主義へ、そしてポストモダンの聖書解釈学の時代へという流れである。

#### 1) 「全体的に」(holistic)

1950年代以降、思想全般に亘って、物事を「全体的に」見ることが主張されてきた。それまでの分析的な「木を見て、森を見ない」アプローチに対して反省がなされ、その結果、1970年代以降、聖書学に於いても文学構造、談話文法や物語批評のように、物事をマクロ的な視点で見ることが強調されてきた。しかし、今や、もう一度、マクロ的な視野を保ちながらも「個々の木を大切に」しなければならないときが来ているのではないかと私は考えている。

#### 2) 著者よりも読者にフォーカス

また、今の時代は、著者よりも読者にフォーカスが当てられている時代で、著者の意図 (authorial intention) が軽視されたり無視されたりする、読者中心の解釈学のもと、聖書本文がどのように「受容」されてきたか、後述するような「受容史」(reception history) に関心が向けられている時代だと思われる。しかし、「受容」する側を意識しながらも、再び、著者を大切にすべきときではないかと思われる。

#### 3) 反歴史的：歴史的事実 (史実) に対する不可知論

第三番目は、この世一般に漂っている「歴史」に対する否定的な態度である。これは聖書学に於いてもそうである。例えば、サムエル記のような歴史文書に

記されている記事が、事実起こったことの記録であるかどうかは「分からない」という不可知論的な見方がある。この30年間、テキストの「あるがまま」の姿 (プロダクト) を見る「共時論」に集中し、テキストの背後に入って行って、その成立のプロセスに注目する「通時論」を軽視する中で、その結果、テキストや著者の「歴史性」(時空性) を無視するまでになってしまったのではないかと思われる。30年前は「救済史」や、歴史的事実と象徴表現が、まだ問題となり得た。私の発題講演でも<sup>3</sup>、「歴史的問題」を扱うことが出来た。今、再び、歴史的事実 (史実) を大事にし、「歴史」に向きあわなければならないときが来ているのではないかと思われるのである。

以上のような聖書(批評)学の変遷を後付けつつ、「福音主義神学の聖書積義」について、限られた時間の中で、重点的に述べたいと思う。

### I. 「福音主義」とは

まず、第一に、「福音主義」とは何か、について纏めておきたい。現代は、いわゆる「文化相対主義のポストモダン」と言われる時代で、聖書の権威についての考え方が問われている。言い換えれば、「聖書信仰」の中味が、今、再び問われているのではないか。私たち、福音主義の立場に立つ者たちには、「聖書は神のことばである」という告白で十分かということである。福音主義神学会は、「聖書は誤りなき神のことばである」という暗黙の了解とその告白のもとに成り立っているからである。

このことには、「靈感」と「無誤性」の教理が関わっている。しかし、後述するピーター・エンズ<sup>4</sup>のように、「靈感」を受け入れれば、現代の聖書批評学の潮流の中で、あとは何を言っても良いと言うことではないと思う。

#### 1) 「靈感」の意味

「靈感」は、聖書の自己主張で、テモテへの手紙第二3章16節に「聖書はすべて、神の靈感、すなわち、神の息吹によるもの」と記されている。しかし、今一度、その言葉の意味を整理する必要があるかもしれない。

<sup>3</sup> その講演の骨格は次の通りである。

I. 歴史的問題 A. 「救済史」の問題、B. 歴史的事実と象徴的表現、C. 類似性  
II. 文献学の問題 A. 「文献批評」 ("literary criticism"), B. 共時的不規則性、C. 比較の方法

<sup>4</sup> Peter Enns, *Inspiration and Incarnation: Evangelicals and the Problem of the Old Testament* (Grand Rapids: Baker Academic, 2005).

## “verbal inspiration”の訳語から見る福音主義の再確認

## a) 逐語靈感

かつて「逐語靈感」が福音派以外の人から誤解され、福音主義者が、あたかも「機械的靈感説」を主張しているかのように批判されたこともある。それゆえ「逐語靈感」に代わる「言語靈感」という用語を提案することによって、我々は“verbal inspiration”が意味していたことを再提示してきた<sup>5</sup>。

## b) 言語靈感

しかし、「言語靈感」の「言語」の理解によっては、靈感をあたかも「思想」を含まないかのような誤解が生まれているかも知れない。20世紀半ばの構造主義の言語学の、ともすれば「機械的言語観」の不備も認識される中で、改めて「言語靈感」を定義し直す必要があるのではないかと思う。私見によれば、「言語」と「ことば」を区別することによって、よりよく整理が出来るのではないかと思う。

## c) ことば靈感

私は、人間の「ことば」(language) と、ヘブル語・ギリシャ語などの個別言語(languages)としての「言語」を区別するべきである<sup>6</sup>と考えている。それで、人間の「ことば」で書かれた聖書が「神のことば」であると言う意味で、「ことば靈感」という訳語を提案したい。

2) 「無誤性」の意味<sup>7</sup>

それでは、「誤りが無い」とはどういうことか。三つの点に纏めることが出来る。

A) 原典、すなわち、autograph (原著者の自筆のテキスト) において誤りが無い。

B) 写本上の誤りはあり得る。

C) 解釈上の誤りは、当然ある。

A) は、私たちの告白であり、福音主義の前提になっている立場である。

<sup>5</sup> 舟喜順一「靈感の用語と概念——用語整理のための覚え書」28-32頁

<sup>6</sup> John Lyons, *Language and Linguistics: An Introduction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981) 参照。

<sup>7</sup> 私は、ここで「無誤性」「無謬性」「不可謬性」の神学的意味の違いを取りあげようとしてはいない。「誤りが無い」と言うことを、「無誤」「無謬」のどちらでも表現できると思う。後述するように、何をもち「誤りである」と判断するのが問題である。

B) 旧約聖書の本文批評の場合、マソラ本文(MT)の信憑性を、死海写本や古代訳(特に、ギリシャ語七十人訳聖書LXX)から吟味する作業の中で、書記の伝統や写本の特徴を十分理解しないで、「誤記」であると決めつけてきたことがあることは認めなければならない。例えば、これまでサムエル記のMTに対して行われてきた「本文修正」の多くは、後述するように、文字の背後にある音声的特徴(phonetic spelling)を理解できなかった故であったり、「言い誤り」による異形を書記による誤記であると判断したり、文体上の「不規則性」の存在を受けとめられないことの故であったりすることが明らかになるにつれて、簡単に、書記による「誤記」であるとは言い切れない状況もあるのではないかと思う<sup>8</sup>。

C) 解釈者の「前理解」・「前提」・「方法論」から来る読み「誤り」もある。大事なことは、現代の読み手(解釈者)には「誤り」に見えるだけかも知れないことが多々あることを認識することではないかと思う。現代人にとって「分からない」「不可解に見える」ことは、分かるときまで待つ姿勢が必要であるかも知れない。十分な判断材料がないときは、無理な解釈をしない。これが原則である。

## 構造主義言語学の弊害?

構造主義の言語学は、20世紀の半ばに盛んであった言語理論であり、私たちの先輩の先生方の受けた教育のなかで、大きな影響力を持っていたものである。それは、しばしば、キチッとした「体系」や「構造」を重んじ、規則に合わないものを切り捨てたり、軽視したりする姿勢に繋がる。構造主義は、謂わば、目の粗い網でものをすくうようなことである。それは、大きなものは得ても、小さなものを失うことを意味する。

上述したように、「靈感」の問題も、「無誤性」の問題も、積義と批評学との関わりの中で論じる必要があるのではないかと思われる。批評学そのものの「現状」を見る前に、「聖書積義」とは何を意味するのかを確認しておきたい。

## II. 「聖書積義」とは

私は、聖書積義を次のように説明したい。

<sup>8</sup> 例えば、D. T. Tsumura, "Scribal Errors or Phonetic Spellings? Samuel as an Aural Text," *Vetus Testamentum* 49 (1999), 390-411; "Textual Corruptions, or Linguistic Phenomena? — The Cases in 2 Samuel (MT) —" *Vetus Testamentum* 64 (2014), pp.135-145 参照。

「聖書の究極の著者である神が、人間の著者を通して伝えようと意図された意味を理解するために、忍耐強く聖書テキストに聞き続けること。」

しかし、聖書テキストに「聞き続ける」ためには、聖書そのものへの信頼と、そこから神の御心を知る熱心と、神が何をお語りになろうとしているのかへの期待がなくてはならない。みことばとその真の著者である神への「恐れ」をもって、みことばに「聞き続ける」ことが必要なのである。

さて、人間の言語で書かれたテキスト (written text) としての「聖書」の特徴は、「言語テキスト」であるということである。聖書は、神の「ことば」が人間の「ことば」、具体的には著者の用いていた個別言語としてのヘブル語、アラム語、ギリシャ語によって「書かれた」ものである。それは、直接、間接、神の命令によって書き下ろされたテキストである。例えば、ハバククは「幻を書け」(ヘブル 2:2) と、神によって命じられたのである。しかし、私たちには、書かれた聖書を「聴く者」として「読む」、すなわち「読み出すこと」(exegesis) が必要である。釈義は「聖書テキストに聞き続けること」であるが、それは、聖書が、現代的な意味で目で「読む」だけでは十分ではない、ということの意味している。聖書は、本来「聴かれるようにして書かれている」からである。聖書テキストの「聴覚性」については後述する。

ここで、人間のことばの多機能性について考えておきたい。

#### <言語の機能の多様性>

確かに、人間のことばの機能の主たるものは、伝達機能 (communicative function) である。しかし「伝達」だけがことばの働きではない。祈りの中で、神に対して、「私は……です」と言うとき、単に自分の思いを「伝達」しているのではなく、「私は……です」と「告白」しているのである。例えば、詩篇 25 篇 2 節の batahti (完了形・1人称) は、「私は信頼しました」と過去のことを伝えているのではなく、今、この瞬間において「信頼します」と告白しているのである。このような、「遂行的な」(performative) 機能は、発話行為とともに、同時に事実が生起するような、「約束します」「宣言します」という例に見られる。神の創造的発言の「光があるように！」も、その発言と共に「光があった」のであるから、遂行的発言と言うことが出来る。

また「感情表出的な」(emotive) ことばは、預言者が、「神の怒りを怒り、神の憐れみを憐れむ」中で、ことばを発しているような場合に見られる。預言者のことばは、正に神の情感 (pathos) の表れであるからである。ことばの「強制的な」(coersive) 機能は、神の命令、奨励、勧告に見られる。命令形、jussive、未完了形、etc.と、文法形式は異なっても、それによって話し手の聞き手に対す

る強い意志が表わされているような場合である。

#### 釈義：「読み出すこと」(exegesis) の大切さ

現代が、主観的に自分の考えや理解を「読み込む」時代であるからこそ、テキストから離れないで、そこから「読み出す」ことが大切である。昨年、ドイツの学会に行ったとき、何人かの学者から「あなたの注解書<sup>9</sup>は、テキストから離れていないことが良い！」と言われた。とにかく「テキストに」密着しているということが注目されたようである。これは、如何に多くの注解書が「テキストから離れている」と言うことの裏返しである。現代は、そのような時代なのである。

#### 「歴史的・文法的釈義」の再定義

今回の研究会議で、聖書の正しい解釈のために、果たして「歴史的・文法的釈義」だけでよいのか、という問いかけがなされているが、「歴史的・文法的釈義」の不充分さを言う前に、「歴史」と「文法」の意味を再確認・再定義することが必要ではないかと思う。

#### 「歴史的」とは？

先程、この 30 年間、テキストの「あるがまま」の姿 (プロダクト) を見る「共時論」に集中し、テキストの背後に入っていく、その成立のプロセスに注目する「通時論」を軽視する中で、その結果、テキストや著者の「歴史性」(時空性) を無視するまでになってしまったのではないかと述べた。このことを、もう少し説明したいと思う。

聖書学に於いて、「歴史」ということばは、「様式史」(Formgeschichte)、「編集史」(Redaktionsgeschichte) のように、ドイツ語の Geschichte の訳語として頻出するが、それは、ものごとの「発生的」側面に光を当てた用語で、言語学的に言えば、ものごとの「通時的」(diachronic) 側面のことを指している。聖書本文の場合、通時的研究はテキストが成立するプロセスに注目することであり、それはしばしば「文学的前史」に遡ることを目的としている。聖書学で言う「歴史的・批評的研究」(historical critical study) の「歴史」は、以上のような「通時的」・「発生的」側面に光をあてる方法で、今あるテキストの背後にどのような資料があるかを突き止めることがゴールとなってきた。しかし、「歴史」(history) は、本来、ものごとの「時空的」(spatio-temporal) 現実に関わるもので

<sup>9</sup> D. T. Tsumura, *The Book of 1 Samuel* (NICOT; Grand Rapids: Eerdmans, 2007).